

協同的な遊びを楽しむ幼児の育成

— 思いや考えを伝え合い、折り合いを付ける経験を通して —

浦添市立内間こども園 金城 咲帆

【要 約】

本研究は、思いや考えを伝え合いながら遊びを展開できる環境構成や援助の工夫を行うことで、自分の気持ちに折り合いを付けながら、協同的な遊びを楽しむ幼児の育成を目指したものである。

キーワード □協同的な遊び □折り合い □社会情動的スキル □学びに向かう力・人間性等

I テーマ設定の理由

近年、少子化、核家族化、デジタル化の進展など、子どもを取り巻く環境は日々大きく変化している。そのため、人と関わる機会が減少し、コミュニケーション能力の低下、人間関係の希薄化が指摘されている。このことは、友達と関わって遊ぶ中で葛藤する体験が減少するなど、幼児の発達にも少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

平成 29 年 3 月告示の幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（以下、教育・保育要領解説とする）では、幼児期に育みたい資質・能力が明記された。平成 28 年の中央教育審議会・幼児教育部会における審議の取りまとめに示された 3 つの資質・能力の具体的な内容を見てみると、「学びに向かう力・人間性等」では「思いやり」や「葛藤」、「折り合い」など人との関わりで育まれる力が多く示されている。これは、幼児期に他者との関わりを通して、豊かな心情・意欲・態度を育む大切さが述べられていると考える。また、教育・保育要領解説「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、協同性として「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」と明記された。これは、協同して遊ぶ中で幼児同士が互いに影響し合いながら、学びの土台を築く重要性が示されていると捉えられる。つまり、幼児期から人と関わる力を育み、生涯の人格形成の基礎を培うことが求められている。これまで共通の目的をもって遊べるよう環境構成や援助の工夫を行ってきたが、遊びの方向性を話し合う場面で互いのイメージを共有できず、意図した展開にならないなど、協同性を育む実践の難しさを感じていた。

本学級の実態として、ほとんどの子が集団生活の経験があるため、友達と関わって遊ぶ姿が見られる。しかし、自分の思いや考えだけで遊びを進めようとし、相手の思いに気付いていなかったり、自分の思いを押し通そうとしたりするなど、自己主張がぶつかり合う場面も多く、遊びが続かない姿もある。そのような姿から、折り合いを付ける経験の積み重ねが必要であると捉えた。これまでの保育を振り返ってみると、協同的な遊びの環境構成が不十分だったことで遊びが継続しなかったと思われる。さらに、数名で行う活動においてそれぞれのイメージにずれが生じた際、互いの思いや考えに気付けるような援助や言葉かけ、葛藤している時の感情に向き合える環境づくりなど、折り合いを付けるための手立てが十分ではなかったと考える。

そこで、子どもの興味・関心から共通のテーマを見出すプロジェクト活動を展開したい。プロジェクト活動の過程では、思いや考えの違いによる衝突や葛藤も予想されるが、自分の気持ちに折り合いを付けられるよう、対話を促す援助を行う。さらに、折り合いを付けた姿を認め、その気持ちに共感することで、友達と一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現される喜びを感じ、協同性を育むことにつながるのではないかと考えた。

以上のことより、プロジェクト活動を展開する中で、自分の思いや考えを伝え合い、折り合いを付ける経験を通して、協同的な遊びを楽しむ子どもを育成したいと考え、本テーマを設定した。

II めざす子ども像

思いや考えを伝え合い、自分の気持ちに折り合いを付けながら協同的な遊びを楽しむ幼児

III 研究目標

プロジェクト活動を通して、友達と思いや考えを伝え合いながら、遊びが展開できる環境を構成し、折り合いを付ける経験を重ねることで、協同性を育む援助について研究する。

IV 研究仮説

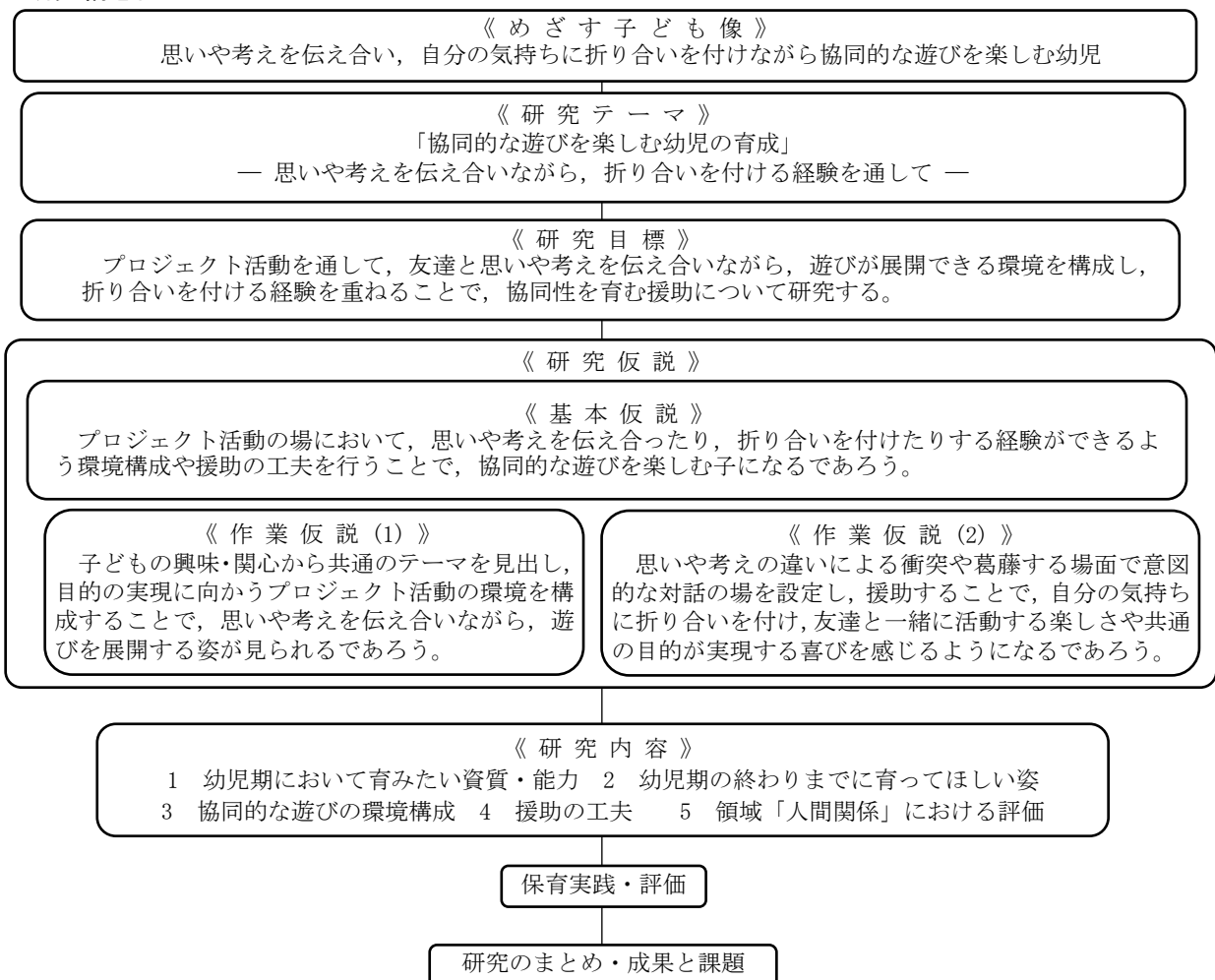
1 基本仮説

プロジェクト活動の場において、思いや考えを伝え合ったり、折り合いを付けたりする経験ができるよう環境構成や援助の工夫を行うことで、協同的な遊びを楽しむ子になるであろう。

2 作業仮説

- (1) 子どもの興味・関心から共通のテーマを見出し、目的の実現に向かうプロジェクト活動の環境を構成することで、思いや考えを伝え合いながら、遊びを展開する姿が見られるであろう。
- (2) 思いや考えの違いによる衝突や葛藤する場面で意図的な対話の場を設定し、援助することで、自分の気持ちに折り合いを付け、友達と一緒に活動する楽しさや共通の目的が実現する喜びを感じるようになるであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 幼児期において育みたい資質・能力

教育・保育要領解説では、これからの変化の激しい社会の中で生きていく力を育むために、必要な資質・能力が明記された。図1は、領域「人間関係」に深く関わりがあると考えられる資質・能力を筆者が下線で表した。これを見ると、領域「人間関係」と3つの資質・能力の「学びに向かう力・人間性等」は密接な関係であることが分かる。

古賀(2024)によると、3つの資質・能力の中で、「考えたり学んだりする営みを支えているのが、学びに向かう力、人間性等」であり、この学びに向かう力と関連付けられる概念として、「社会情動的スキル」を挙げている。この「社会情動的スキル」について古賀(2024)を基に、筆者が表1に

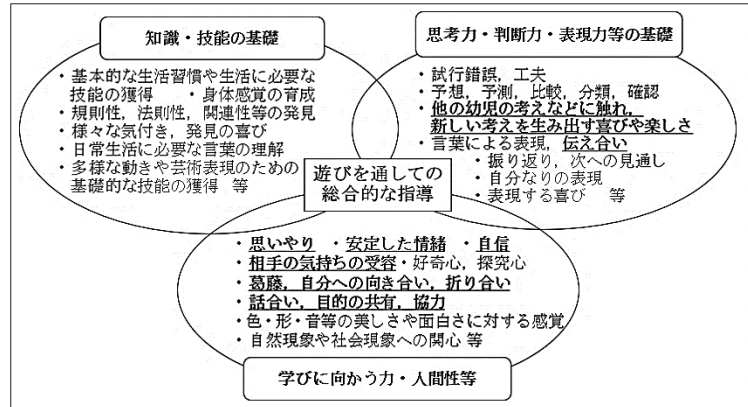


図1 幼児期の教育において育みたい資質・能力
出典：文部科学省「幼児教育部会における審議の取りまとめ」2016

まとめた。「社会情動的スキル」と対照的に捉えられるものに「認知的スキル」があるが、3つの資質・能力のうち、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」はこれにあたる。社会情動的スキルと認知的スキルは相互に作用し、お互いに影響を与え合うことから、切り離すことはできない。また、様々な研究の結果等から社会情動的スキルが後の知的な発達や学業上の成功、ウェルビーイングにつながるようになってきている。これらのことから、「学びに向かう力・人間性等」は、他の2つの資質・能力の土台となる重要な部分であると考えられる。

表1 社会情動的スキル

社会情動的スキル	
目標の達成に向かう力	忍耐力、自己制御、意欲、目標への情熱、自己抑制、興味を持続する力、自己効力感、自己有用感等
他者と協働する社会性に関わる力	社会的スキル、協調性、信頼、共感、敬意、思いやり等
情動をコントロールする力	自己調整力、自尊心、楽観性、自信等

2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

(1) 「協同性」について

教育・保育要領解説幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「協同性」には、「友達と関わる中で、互いの思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる」と示されている。古賀(2024)によると、協同性を発揮するには「自分とは異なる他者の気持ちがあることを理解し、自分のやりたいことを伝えて実現したり、他者の意見にも耳を傾けて、粘り強く交渉したり、時には我慢や妥協をしたり、すべきことを優先したりすることも求められる」と述べられている。これらは、「一定の年齢に達すれば自然にできるようになるというわけではない」ことから、遊びの中で友達と関わり、時には思いのぶつかり合い等のいざこざを経験し、葛藤を乗り越え、自分の気持ちに折り合いを付けることで育まれるものであると考える。青柳(2018)は、協同性を育むために「共通の目的の実現に向けて、子ども同士がアイデアを出し合い、刺激し合い、試行錯誤していく、というイメージをもつことが大切」と述べており、共通の目的を実現するまでのプロセスの重要性が分かる。これらを踏まえ、本研究では、他者との葛藤の場面に着目し、試行錯誤しながらも目的の実現に向かおうとするプロセスを丁寧に捉えることで、協同性を育てていく。

(2) 「道徳性・規範意識の芽生え」について

教育・保育要領解説において、「5歳児の後半には、いざこざなどうまくいかないことを乗り越える体験を重ねることを通して人間関係が深まり、友達や周囲の人の気持ちに触れて、相手の気持ちに共感したり、相手の視点から自分の行動を振り返ったりして、考えながら行動する姿がみられるようになる」とある。無藤・古賀（2016）は、「幼児期において、葛藤やつまづきを経験しながら（中略）自己発揮と自己抑制という気持ちの調整力を育むことが重視されている」と述べている。協同して遊ぶ場面では、思いのぶつかり合いが起こるが、道徳性や規範意識の芽生えには、とても重要な出来事であると捉える。幼児一人一人の心の動きを読み取り、適切な援助を行うことで、道徳性や規範意識が芽生え、気持ちの調整力を育むことができるだろうと考える。

3 協同的な遊びの環境構成

(1) 協同的な遊びの捉え

教育・保育要領解説では、協同して遊ぶようになるためには「互いに関わりを深め、ともに活動する中で、みんなでやってみたい目的が生まれ、工夫したり、協力したりするようになる」と示されている。また、「この過程の中で、園児は、自分の思いを伝え合い、話し合い、新しいアイデアを生み出したり、自分の役割を考えて行動したりするなど、力を合わせて協力するようになる」とある。このように、幼児一人一人が発達に必要な体験を得られるようにすることが求められている。奥谷（2024）は、協同的な遊びは「気の合う遊び仲間同士で始まった遊びが、まわりの仲間を巻き込みながら、しだいにより大きな目的が生まれ、協同遊びへと広がっていく」と述べている。本研究では、奥谷（2024）の考え方を協同的な遊びとして捉え、環境構成や援助の工夫を行うことで、葛藤する経験を重ね、協同性を育むことができると考える。

(2) プロジェクト活動

先に述べた協同的な遊びを進める上で、「プロジェクト活動」の環境を構成したい。プロジェクト活動は、20世紀初頭にW・キルパトリックが提唱した「プロジェクト・メソッド」をルーツに広がった方法論である。その後、世界中で広がり、様々な理論の捉え方がある。その中から無藤（2009）の「フィールドベースのプロジェクト活動」に着目した。無藤（2009）は、「子どもがいろいろなものに出会うことによって何かやってみたいことが生まれて、それを膨らませることによって大きな目標をつくっていった、その上で展開」していくことが重要だと述べている。これは、保育者主導の保育ではなく、子どもの興味・関心を生かしつつ、保育教諭の意図を加えた環境をベースに、共通の目的の実現に向けて遊びを展開していく活動であると捉える。したがって、本研究では、無藤（2009）に示されているプロジェクト活動の考え方を基に保育を展開する。

活動の方向性の具体として、OECDのラーニング・コンパス 2030 に示されている「AARサイクル」を活用し、筆者が図2にまとめた。導入の環境・援助の工夫でやってみたい気持ちを引き出し、Anticipation（見通し）、Action（行動）、Reflection（振り返り）のサイクルでプロジェクト活動を行うことで、共通の目的を意識しながら協同的に遊ぶだろうと考える。

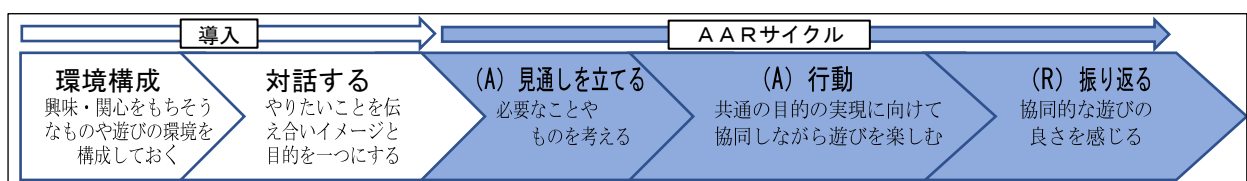


図2 AARサイクルを活用したプロジェクト活動のプロセス

OECD ラーニング・コンパス 2030
「AARサイクル」を参考に作成

4 援助の工夫

(1) 折り合いを付けるための援助

無藤・古賀（2016）は、折り合いを付けるとは「自己発揮しながら人と折り合いを付け、気持ちを調整する」と定義している。また、「他の子どものなかで自分がどのように生活していくとよいかに気づくこと」「遊びに夢中になり探究し、集団のなかでも自分の力を発揮すること」「学級や仲間のなかで自己が認められ、集団のなかで自分の存在感をもつこと」が具体的な姿であると述べている。保育教諭は、いざこざの場面で問題の解決に注力しがちだが、折り合いを付けるためには、子どもの思いの背景や心の動きに着目し、適切な援助を行う必要がある。表2は、無藤・古賀（2016）の発達の道筋を表す「7つの折り合う姿」を参考に、本研究テーマである「協同的な遊び」に関連する姿を筆者がまとめたものである。表2の視点を手がかりに援助を行うことで、自分の気持ちに折り合いを付けながら、協同的な遊びを楽しむことができるようになると思う。

表2 折り合う姿の援助の工夫 古賀（2016）「7つの折り合う姿」を一部引用し作成

折り合う姿	発達の視点	保育者の援助	対話が生まれる環境構成
○遊びを共有した友達との関わりを深めながら、保育者とともに折り合う。	・保育者に見守られつつ自分の思いを自分なりに伝えようとする。 ・相手が納得することで自分も納得する。	①相手との思いの違いを知り、相手の表情や言葉を読み取り、自分はどうしたいのかを考えようとする間を大事に、声かけを行う。 ②自分も相手も納得したことを感じられるよう、思いを訪ねたり代弁したりして、互いをつないでいく。	【少人数で対話する場】 ・互いの思いや考えを伝えられるよう、落ち着いた環境を用意する。
○大好きな友達と一緒に遊びを続けるために友達と折り合う。	・大好きな友達に思いを伝えたり、相手の思いを知ったりする。	③子どもの様子や言動から一瞬を逃さずに本当の気持ちを探り、その思いを受け入れる。 ④思いを伝えられるよう、一緒に振り返り、相手に伝えようとする姿を待ったり、後押ししたりする。 ⑤互いに思いを出し合うことができるよう、それぞれの思いを確認したり、言葉が足りないところを補い、伝えたりしてつなぐ。	【サークルタイム】 ・多様な意見に触れられるようにする。 ・それぞれの遊びの経過を共有できるようにする。
○関わりを広げることで自分自身と折り合う。	・相手の思いを感じたり自分の思いを受けとめてもらったりして前に進もうとする。	⑥誰と一緒に遊びたいか、したい遊びが何なのかなど、子どもの思いを問い、いっしょに考える ⑦目標をもち、挑戦したい気持ちを受けとめる。	【集団遊び】 ・ルールのある遊びをみんなで楽しむ機会を学級全体でもつ。
○さらに関わりを広げながら保育者に支えられ友達と折り合う。	・友達とのイメージの違いを理解し納得して、また遊びを続ける。	⑧それぞれのイメージを共有できるように保育者が思いを汲み取り代弁し、互いの思いをつなぐ ⑨クラスみんなで一緒に考える機会をもち、様々な思いに触れられるようにする。	
○みんなのなかで折り合う。	・仲間であることを感じながら、友達に関わり受け入れたり受け入れられたりする。	⑩子ども同士で様々に見通しをもちながら生活や遊びを進めていくことができるように時間をとって見守り、協力している姿を認めていく。	

(2) 葛藤場面での援助

折り合いを付けようとする場面には、葛藤をする姿が見られる。無藤・古賀（2016）では、「折り合いには、葛藤の場面で、自分はどのようにしたいのかと自問自答し、自分と向き合うことが必要」と述べられている。また、そのためには「自分と向き合うことができる自立心」「自分はこうしたい、自分はこれでいいのだという自己肯定感」「自分でできた喜びやその挑戦の過程を自分で認めることができる自信や新たな自分に自ら向かっていこうとする意欲」が大切であると述べている。つまり、葛藤する経験が折り合いを付けることや協同性の育ちへの大切なプロセスであると考えている。

そこで、葛藤場面で求められる社会情動的スキルの支援の方法について、河村（2022）を参考に筆者が表3にまとめた。協同的な遊びを楽しむために必要な社会情動的スキルが育めるよう、援助の視点を意識した保育教諭の関わりが大切であると考えている。

表3 葛藤場面での援助の工夫 河村(2022)第4章を一部引用し作成

育みたい 社会情動的スキル	○自分の特性や能力に自信をもつ「自己効力感」「自己肯定感」 ○自分で考え判断し、自分の意志で選択して行動する「自律性」 ○目標に向かって粘り強くやり抜く力「グリット」 ○自分の衝動を抑え自分の行動をコントロールする「自制心」 ○集団の中で自らの居場所を見つけ、他者と互いに助け合いながら活動できる力「協調性」 ○他者の困り感などを理解でき自然に助けようとする「共感性」「思いやり」	
子どもの状況	必要な 社会情動的スキル	求められる援助
○思い通りにならない時感情的になる	「自制心」 「自律性」	①…感情の高まりを押さえ、考える間をとれるよう声掛けを行う。 ②…気持ちが落ち着いた後、感情的になった背景を汲み取り、共感しながらもどのような行動がよかったのか一緒に考える。
○困難にぶつかると諦めてしまう	「グリット」「自制心」 「自己効力感」 「自己肯定感」 「自律性」	③…自分事と感じられるようにし、やってみた成果のメリットが理解できるようにする。 ④…協同活動の終わりには、活動の成果やプロセスを認め合う振り返りを行い、承認感を味わえるようにする。
○失敗すること・傷つくことを恐れている	「自律性」「自制心」 「自己効力感」 「自己肯定感」	⑤…主体的に取り組めるよう選択肢を多く用意し、自ら選択できるようにする。 ⑥…取り組みの見通しがもてるようにする。
○協同の経験が少なくその意味や価値が理解できていない	「自制心」「共感性」 「思いやり」「協調性」	⑦…単純なルールで子どもが喜ぶ集団遊びや協同活動を設定し、活動する体験を積み重ねることで協同活動するスキルが高まるようにする。

5 領域「人間関係」における評価

教育・保育要領解説では、評価について「指導の過程を振り返りながら、(中略)園児の理解を進め、園児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるものなどを把握するとともに、保育教諭等の指導が適切であったかどうかを把握し、指導の改善に生かすようにすること」と示されている。岩立(2018)では、領域人間関係における評価について、「幼児の行動を記録し、幼児理解を深めていくことが一層重要になる」と述べられている。

(1) 協同して遊ぶようになる過程

協同性を育むためには、共通の目的に向かうプロセスの経験が大切であると考えられる。図3は、入園から修了までに協同して遊ぶようになる過程を大きく3つの時期に分けて表したものである。第I期～第III期それぞれの経験を積み重ねていくことが重要であることから、本研究では、図3の育ちの過程を意識し、幼児理解を深め、評価に活用していく。

(2) ドキュメンテーションの活用

大豆生田・おおえだ(2020)によると、「ドキュメンテーションとは、写真つきエピソード記録のことであり、子どもの姿や学びのプロセスを記録し、可視化することができる手法である」と述べられている。協同性は心の育ちであるため、表面では見取りにくい。写真から子どもの姿を把握し、遊びの中でのつぶやきやエピソードをドキュメンテーションに記録することで、どのような協同性の育ちがあるのか見取る有効な手段であると考えられる。また、その記録を振り返り、必要な環境や援助など保育計画の見直しにも活用できると考える。

入園		修了	
発達 の 時 期	第I期 3歳児入園から4歳児前半	第II期 3歳児後半から5歳児前半	第III期 5歳児後半
	初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期	遊びが充実し自己を発揮する時期	人間関係が深まり学び合いが可能となる時期
協 同 し て 遊 ぶ よ う に な る 過 程 ・ 見 取 り の 視 点	協同する経験 協同の基盤となる経験 共同する生活の経験		
	○同じ場で見たり触れたり行為を模倣したりする ○場を共有し、つながり合う気分を味わう ○イメージの世界に浸り、感情を共有する ○友達のことを感じながら、個々の遊びを楽しむ	○場やものを共有し、友達とかわって遊ぶ楽しさを知る ○イメージや考えを伝え合い、表現する楽しさを味わう ○葛藤を乗り越え、友達と一緒に遊びをつくりだす ○体験を深め、学級の友達と遊びの楽しさを共有する	○目的を共有し、友達と相談しながら遊びを進める ○新しいアイデアや遊びのルールを生みだす ○友達によさや持ち味を感じながら、目的を実現し達成感を味わう ○様々な人とのかわりの中で刺激を受けながら、自分の見方や考えを広げる

図3 協同して遊ぶようになる過程

全国国公立大学付属学校連盟幼稚園部会
「協同して遊ぶことに関する指導の在り方」2010, p.2を参考に作成

Ⅶ 保育実践

当初の計画では、散歩の経験から様々なお店作りへ遊びが展開していくことを予想し、「うちまこどもタウンをつくろう」というテーマを設定していた。しかし、実践3のイメージを共有する過程で子どもの興味・関心に変化があり、遊びのテーマが一つになる場面があった。そこで、子どもの姿に合わせて全体計画を見直し、実態に即した検証保育になるよう実践計画を再構成した。

➡ “うちまっこレストランをつくろう”

1 検証保育“うちまこどもタウンをつくろう”の全体計画 ★予想されるいざこざ、葛藤場面

実践	日程	題材	ねらい	活動内容	
1	12/1 (月)	環境 構成	わくわく散歩 に出かけよう	<ul style="list-style-type: none"> 「わくわくするもの」を見つけながら、自分の住んでいる地域に興味・関心をもつ。 散歩をしながら近所のお店を見つけ、お店の雰囲気や場所を知る。 興味のある「わくわくするもの」を見つけ、それを保育教諭や友達に伝えようとする。 散歩で見つけたことを伝え合い、自分の地域の良さを感じる。 	
2	12/8 (月)	対話	「やってみたい」 を出し合おう	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいことを友達と伝え合う。 やりたいことを選び、遊びに期待をもつ。 散歩で見つけたものや感じたことから再現できそうな遊びを考え、アイデアを出し合う。 自分のやりたい遊びを選択する。 <p>★自分がやりたい遊びを選択できず葛藤する 等</p>	
3	12/9 (火)	見通し (A)	イメージを 共有しよう	<ul style="list-style-type: none"> 遊びのイメージを共有する。 必要なことやものを考え、友達と伝え合う。 遊びのイメージを伝え合い、共有することで共通のテーマが生まれる。 目的の実現にはどんなことやものが必要か考えを出し合う。 遊びに必要な材料や素材を集める。 <p>★自己発揮できない、意見の相違、自分の気持ちに折り合いを付けられない 等</p>	
4	12/10 (水)	行動 (A)	うちまこども タウンを つくろう ↓ うちまっこ レストランを つくろう	<ul style="list-style-type: none"> 共通の目的の実現に向けて、試行錯誤したり、協力したりしながら遊びを楽しむ。 	
5	12/11 (木)			<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いや考えを伝え、相手の話を聞こうとする。 	
6	12/12(金)			<ul style="list-style-type: none"> 自分の力を発揮しながら、互いの良さや違いに気付く、認め合ったり受け入れたりする。 イメージを広げ、新しいアイデアを生み出す。 思いがぶつかり合う場面では話し合い、互いの思いや考えを伝え、自分の気持ちに折り合いを付けながら合意形成を図る。 遊びを楽しくするために、自分の思いと友達の思いとの間で、どうすれば良いか調整しようとする。 <p>★イメージが共有できない、意見の相違、困難にぶつかり諦める 等</p>	
7	12/15 (月)			<ul style="list-style-type: none"> 友達と相談し、役割を決めたりなりきったりする。 やってみて難しかったことや工夫が必要なことを考え、伝え合う。 自分の思うようにならず葛藤する際は、話し合い、折り合いを付けようとする。 <p>★意見の相違、イメージしていた通りにいかない、自信がない 等</p>	
8	12/16 (火)			<ul style="list-style-type: none"> 友達と力を合わせて完成させたもので遊ぶ楽しさを味わう。 	
9	12/17 (水) 本時			うちまタウンに 招待しよう！ ↓ 「オープン！ うちまっこ レストラン」	<ul style="list-style-type: none"> 共通の目的の実現に向けて協力し、充実感をもってやり遂げる。 自分の役割を考えて行動し、友達と協力しながら遊ぶ。 友達とイメージを共有しながら、遊ぶことを楽しむ。 もっと遊びが楽しくなるように、考えたり工夫したりする。 <p>★自分のイメージ通りにいかない 等</p>
				振り返り (R)	思いを 伝え合おう

2 検証保育

(1) 活動名 「うちまっこレストランをつくろう」

(2) 活動設定の理由

本学級の子ども達は、気の合う友達と自己発揮しながら一緒に遊ぶことを楽しんでいる。一方で、遊びのイメージを共有できない際に、思いや考えがぶつかり、折り合いを付けられない姿や特定の友達以外には自分の思いを十分に表せない姿も見られる。そこで、興味・関心が高まっている事象からイメージを広げ、共通のテーマを見出し、その実現に向かって活動することで、互いの思いや考えを伝え合い、折り合いを付けながら遊ぶ楽しさや充実感を味わうことができるのではないかと考え、本活動を設定した。

(3) 思いや考えを伝え合い、折り合いを付けながら協同的に遊ぶ姿を読み取る視点

折り合う姿（表2）や葛藤場面での援助の工夫（表3）を活用して援助を行い、写真や子どものつぶやき、エピソードを記録したドキュメンテーションから、協同性の育ちや内面の変化を読み取る。その考察を基に環境の再構成や援助の工夫に生かしていく。

(4) 実践の保育展開

○遊びの内容 ◎子どもの姿、つぶやき ☆保育教諭の関わり、願い ★【表2 折り合う姿の援助の工夫を参照】
◇環境構成 ●協同して遊ぶようになる過程（図3）を参照

実践1（環境構成） ○散歩をしながら、興味のあるものを見つけ、保育教諭や友達に伝えようとする。
○実際に見て感じたことや気付いたことを伝え合い、自分の地域への興味・関心を深める。

●体験を深め、学級の友達との遊びの楽しさを共有する（第Ⅱ期）

◎気になるお店を見つけ、友達と発見を伝え合ったり、保育教諭に知らせたりする。
☆お店の中にあるものに気付いてほしいと願い、「お店の中には何がある？」と問いかける。



◎振り返りでは、「パン屋さんあったよね。行ったことあるよ！」など自分の見つけたものを言葉にして伝え合っている。

☆自分の地域に、より関心をもってほしいと思い、「みんなの住んでいる場所は何ていう場所？」と尋ねると、すぐに「うちま！」と答えていた。

実践2（対話） ○遊びのイメージを膨らませ、やりたいことを出し合う。

○自分のやりたいことを決める。

●イメージや考えを伝え合い、表現する楽しさを味わう（第Ⅱ期）

☆前回の散歩から少し日が経っていたため、ドキュメンテーションを見ながらどんなお店があったか振り返った。

散歩での発見を遊びにつなげてほしいと思い、「どんなことしたい？」と問いかける。

◎散歩で見つけたお店をやりたい子、その他のお店を挙げる子がいる。

◎自分達が挙げたお店でやりたいことを選び、ホワイトボードに自分の名前のマグネットを貼っている。
★やりたいことが決められず、迷っている子に「どれなら楽しめそう？」など声を掛け、思いを引き出す。 【折り合い ⑥】

◇やりたいことを途中で変更できるようホワイトボードと名前のマグネットを用意する。



◎ラーメン屋さんを選んだ子数名が折り紙や廃材を使ってラーメン作りを始めた。

◇イメージが広がるように、ごっこ遊びができる環境の構成や、必要な材料を聞き、子ども達と一緒に用意した。

☆保育教諭も遊びに加わり、ごっこ遊びのやりとりを楽しめるよう援助した。



実践3 (A 見通し) ○遊びのイメージを共有し、活動の見通しをもって計画を立てようとする。

○必要な材料や素材を集める。

●目的を共有し、友達と相談しながら遊びを進める (第Ⅲ期)

◎前日にラーメン屋さんを楽しんでいた子が「やっぱりレストランをやりたい」と言い変更すると、周りの子もレストランを希望する。保育教諭が「じゃあラーメン屋さんはどうする？」と尋ねると、しばらく考えた後、「ラーメン屋さん」とレストランを合体したらいいんじゃない？」と新たなアイデアが生まれた。

◎アイス屋さんやジュース屋さんも「レストランと合体したい」とつぶやく子がでてきた。

★グループの友達同士で相談する機会にしてほしいと思い、レストランと合体してもいいか話し合うよう促した。 【折り合い ⑧】

◎なぜレストランと合体したいのか、合体したくないのかそれぞれの思いを言葉にして伝え合い、どうするか考え、合意形成を図っていた。



◎ラーメン・パン・アイス・ジュースはレストランと合体、美容室・寿司は単独でやることに決まった。

＜レストランの形式を巡る場面＞

★レストランのイメージを共有してほしいと願い、どんなレストランにしたいのか尋ねた。 【折り合い ⑧, ⑨】

◎個々がイメージしているレストランが違うことに気付く。イメージを共有するために話し合うが、自分の思いを強く主張する子がでてきた。

★それぞれの思いを引き出したり代弁したりしながら、相手の思いに気付き、折り合いが付けられるよう援助した。 【折り合い ⑤】



◎自分の思いを強く主張していた子が、「注文したものと違うものが届いたことがある」という子の経験談を聞き、そうなるかもしれないと考え納得し、「じゃあそっちの考えでいいよ」と折り合う姿が見られた。

実践4～8 (A 行動) ○友達とイメージを共有し、共通の目的の実現に向けて試行錯誤しながら遊ぶ。

○イメージが共有できず、いざこざになる。

○目的の実現に向けて、友達と力を合わせながら活動に取り組む。

○友達と相談して役割を決め、つくったもので遊ぶ。

●葛藤を乗り越え、友達と一緒に遊びをつくりだす (第Ⅱ期)

【事例1】「パンの生地返して」

◎パンを焼くオーブンを段ボールで作り、イメージしたものをつくりあげる楽しさを味わうA児の姿が見られた。

☆オーブン作りをきっかけに友達とつながってほしいと願い、サークルタイムで完成品の紹介を促した。

◎みんなに「すごいね」と言われ、嬉しそうにするA児。オーブんに興味をもった周囲の子がパン作りに加わり始め、A児と関わる姿が見られた。



◎しかし、一緒に遊んでいるうちにパンをつくる粘土を巡っていざこざになる。その時の思いをA児がサークルタイムで話し始める。

★みんなで一緒に考える機会になればと願い、サークルタイムの中でA児・B児それぞれの思いを聞いた。 【折り合い ⑤, ⑨】

◎強い口調で言い争う場面もあったが、それぞれが自分の思いを言葉で伝えようとした。互いの思いに気付きながらも、分かってもらえない悔しさからその場を離れるA児。しかし、部屋から出て行くことはなく、同じ空間にいたようとしていた。

★今は話したくないという思いを受け止め、気持ちが落ち着いてから話し合うことにした。 【折り合い ③, ④】



◎しばらくして給食準備の時間になると、いざこざになっていた2人が一緒に給食を食べようとしていた。「仲直りできたの？ どうして仲直りしようと思ったの？」とA児に尋ねると、「だってまた一緒に遊びたいから。一緒に遊んで楽しかったから」と話していた。その思いをB児に伝えると、グータッチをしながら「また遊ぼうな！」と約束する姿が見られた。

評価・課題

- ・共通のテーマが見出せるよう一人一人のイメージを丁寧に引き出し、話し合う場を設けた。その結果、自分の思いを言葉で伝え、相手の思いに気付きながら折り合いを付けようとする姿が見られた。
- ・遊びのイメージを膨らませる材料や素材を準備し、子どもの興味・関心に合わせて環境を繰り返し見直した。これにより、遊びが継続し、友達と試行錯誤しながら主体的に遊び込む姿へとつながった。遊びを深めるために、子どもの興味・関心とその都度見取り、環境を再構成し続ける重要性を再確認した。
- ・いざこざの場面で、表2の折り合う姿の援助の工夫を活用し援助を行った。自分の気持ちを整理し、言葉で伝え合う経験をしたことは、「友達と一緒に遊んで楽しかった」という達成感をもたらし、自己調整しようとする姿へとつながった。
- ・一度は折り合いがついたとしても、同様のいざこざが繰り返される場面も多かった。気持ちの調整力を育むには、葛藤を乗り越える経験を積み重ねられるよう、継続的に援助していく必要がある。

3 本時の保育実践 『オープン！うちまっこレストラン』

保育指導案

令和7年12月17日（水）9:45～11:00

そら組（年長） 男児12名 女児13名 計25名

金城 咲帆

(1) 題材名『オープン！うちまっこレストラン』

(2) 本時のねらい

- ・共通の目的の実現に向けて協力し、充実感をもってやり遂げる。
- ・共通の目的が実現した喜びや達成感を味わう。

(3) 保育仮説

- ・共通の目的の実現に向かうプロジェクト活動の環境を構成することで、思いや考えを伝え合いながら、遊びを進めようとするであろう。
- ・いざこざや葛藤の場面で意図的な対話の場を設定し、援助することで、自分の気持ちに折り合いを付け、友達と一緒に活動する楽しさや共通の目的が実現する喜びを感じるようになるであろう。

(4) 教材（道具・素材）について

- ・段ボールや空き箱、毛糸、プラスチック容器など様々な素材を用意し、イメージを膨らませながら遊びを展開できるようにする。
- ・段ボールカッター、ボンド、のり、はさみなど様々な用具を用意しておき、要望があった際にすぐ提供できる環境を整えておく。

(5) 展開（実践・本時）

時間	○活動の流れ ・子どもの姿	★保育教諭の援助 ◇環境構成
9:45	<p>○(A)見通し…活動の見通しをもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウェビングマップを見て、これまでの遊びを振り返る。 ・今日の遊びの役割をグループで確認し、見通しをもつ。 <p>○(A)行動…各コーナーの準備・役割分担</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで役割を分担し、自分の役割を知る。 ・遊びに期待をもちながら、準備を行う。 <p>～ オープン！うちまっこレストラン ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お客さんとのやりとりを楽しみながら、自分達でつくりあげたものを買ってもらおう。 ・お客さんと呼び込んだり、商品をすすめたりする。 ・役割を巡っていざこざになる。 ・足りなくなった商品を補充したり、つくったりする。 <p>○(R)振り返り…サークルタイム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで楽しかったことや難しかったことなどを伝え合う。 	<p>★写真など視覚的に分かりやすいものを使いながら、これまでの活動を振り返り、今日の遊びに意欲がもてるようにする。</p> <p>◇ウェビングマップ、グループ表を見やすい場所に掲示する。</p> <p>★今日の遊びの役割を自分達で分担できるよう見守りながら、折り合いが付けられない時は援助の視点を活用して仲介する。</p> <p>◇役割を可視化できるよう紙やペンを用意しておく。</p> <p>★互いの思いや考えを出し合いながら遊びを展開する過程を見守り、必要に応じてイメージの共有を促したり、遊びがさらに深まるような言葉かけや援助を行ったりする。</p> <p>★いざこざが起きた際は、保育教諭がそれぞれの思いを受け止め、状況を整理しながら伝え、どうしていきたいか考えられるよう援助する。</p> <p>◇足りなくなったものをつくる環境を用意しておく。</p> <p>★本時だけでなく、活動全体の過程を振り返り、協力して成し遂げた喜びや葛藤を乗り越えた経験を価値づけることで、協同して遊ぶことの充実感を味わえるようにする。</p>
11:00		

**(6) 本時の遊びの様子 ●協同して遊ぶようになる過程（図3）を参照
【表2 折り合う姿の援助の工夫を参照】 《表3 葛藤場面での援助の工夫を参照》**

●イメージや考えを伝え合い、表現する楽しさを味わう（第Ⅱ期）

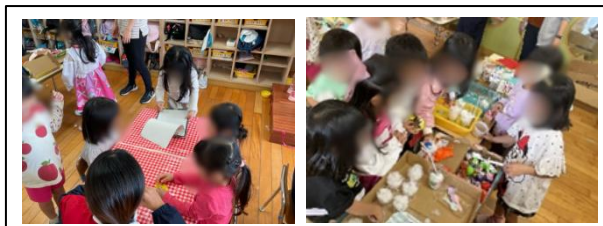


図4 お客さん（年少・年中児）とのやりとりを楽しんでいる様子

お客さんを席に案内し、注文を取ったり、商品を勧めたりしていた。相手が自分より年下であることを理解し、優しい言葉で説明しながら、ごっこ遊びのやりとりを楽しむ姿が見られた(図4)。

●目的を共有し、友達と相談しながら遊びを進める（第Ⅲ期）



図5 友達と協力し合っている様子

お客さんを招待する前に、舞台に集い、自分達でダンスのリハーサルを始めた。一人は観客の目線でアドバイス役になるなど自分の役割を考えて行動し、協力し合う姿が見られた(図5)。

【事例2】「一生懸命準備したのに・・・」

●イメージや考えを伝え合い、表現する楽しさを味わう(第Ⅱ期)

ラーメンコーナーの開店を心待ちにしていたC児は、1時間前から場の整理に励んでいた。段ボールの壁をソフト積み木で補強するなど、友達と協力して準備する姿からは、遊びへの強い期待感が伺えた(図6 ア)。

そこへ、戸外遊びから戻ったD児が加わりようとした際、不注意で壁を倒してしまう。準備の過程を見ていなかったD児に対し、思いを込めて場を整えていたC児は怒り、「出て行け!仲間に入れてない!」とD児を押してしまった。D児は、自分が壁を倒してしまったことよりもC児に押されたことに不満を募らせていた。

その後、D児はその場を離れ、両者の思いがすれ違ったまま、いざこざが残る形となった(図6 イ)。他児の対応で即時の介入が困難だったため、時間をおいてからC児と対話の場をもった。

いざこざの時の感情を「壊されたから怒った」と表現するC児に、「一生懸命準備して大変だったんだよね。それが壊れて悲しかったんだよね」と感情的になった背景を汲み取り、C児の思いに共感した。《葛藤 ②》

その上でD児も前日まで一緒に準備していたこと、倒してしまったのはわざとではなかったことを伝え、C児はどのような行動をした方がよかったのか一緒に考えた。《葛藤 ②》

怒っている理由を言葉で伝えた方がよかったと気付くC児。具体的な言葉のやりとりは見られなかったが、その後のD児と一緒に他の遊びを楽しむC児の姿から、気持ちに折り合いが付けられていることが感じ取れた。



図6 ラーメンコーナーでの様子

【事例3】「アイスの入れ方を巡って」

●目的を共有し、友達と相談しながら遊びを進める(第Ⅲ期)

アイスコーナーでは、前日まで遊びを継続してきたE児と、この日から加わったF児との間で、アイスの入れ方を巡り意見が対立した(図7 ア)。

対話の様子

E児「昨日までは、綿の上にアイスに乗せて準備したよ」
F児「綿はあとから入れた方がいいよ。クリーム(綿)がない人もいるかもしれないさ」
E児「クリーム(綿)いらなくて言う人いなかったよ」
F児「Fは綿をアイスの横に入れたいわけ。だから後から綿を入れた方がいいの」

保育教諭は、子ども同士の対話による解決を期待し、やりとりを見守っていた。しかし、お互いの思いを言葉にして伝えているものの折り合いがつかず、強い口調で言い合う場面もあった。そこで、お互いの思いを汲み取り、それぞれの考えを合わせてみてはどうかと提案した。E児・F児どちらも自分のこだわりを譲れず、考えを合わせることは嫌な様子だった。またしばらく思いを伝え合うが、平行線だったためもう一度保育教諭が仲介に入る。

対話の様子

保:「それぞれが思うアイスを作って見比べてみよう」【折り合い ①】
～それぞれが作ったアイスを見せ合う～
F児:「もうE児が作ったアイスでいいよ」と言い、部屋から出て行く。
保:「出て行っちゃったけどどうする?」【折り合い ④】
E児:「もう一回話をしたい。先生、一緒に行こう」
～保育教諭を仲立ちとして、改めてF児との対話の場をもつ～(図7 イ)
保:「なんでE児のアイスでいいと思ったの?」【折り合い ⑤】
F児:「E児が作ったアイスを見てそっちの方がいいと思った。」
保:「じゃあE児の入れ方でアイスを作ることにする?」【折り合い ②】
～E児・F児がうなずく～



図7 E児・F児のやりとりの様子

アイスの入れ方はE児の案に決まり、一見解決したように見えた。しかし、二人はどこか納得しきれない様子で、部屋に戻ってからも繰り返し対話する姿があった(図7ウ、エ)。

最終的にこの日は二人と一緒に遊ぶ姿は見られなかった。後日、個別に思いを聞くと、E児は「F児に強い口調で言われたことが悲しかった」と語り、一方でF児は「強く言ったつもりはなかった」と振り返っていた。このことから、アイスの入れ方だけでなく、言葉の伝え方のすれ違いがわだかまりとして残っていたことが分かった。

評価・課題

- ・遊び込んできた場にお客さんが来たことで、「喜んでもらいたい」という新たな目的が生まれた。その実現に向け、友達と考えを出し合いながら準備を進める姿に協同性の育ちが見えた。
- ・一人一人の興味・関心を捉えた環境構成を行うことで、子どもが遊びに主体的に関わり、その充実感の中で自然に周囲の友達とも関わりを広げていく姿が見られた。
- ・複数のいざこざが同時に起きた際、個々の葛藤場面に十分に関われず、折り合いを支える援助が不足した場面があった。

Ⅷ 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

子どもの興味・関心から共通のテーマを見出し、目的の実現に向かうプロジェクト活動の環境を構成することで、思いや考えを伝え合いながら、遊びを展開する姿が見られるであろう。

(1) 子どもの興味・関心を生かした意図的な環境構成（フィールドベースのプロジェクト活動）

身近な場所に様々なお店がある園周辺環境の良さを生かし、実践1では地域へ散歩に出掛けた。散歩を通じて、パン屋さんやラーメン屋さんなど地域のお店の発見を楽しむ姿が見られた。

実践2では、実践1での発見を振り返りながら、自分のやりたい遊びを伝え合う場を設けた。散歩で見つけたお店以外にもやりたいことを挙げ、遊びのイメージを広げる姿が見られた。この日は、製作活動に入る予定ではなかったが、廃材コーナーから様々な素材を集め、ラーメン作りを始める子の姿があった。そこで、さらに興味・関心を深めてほしいと思い、すぐに遊びの環境を構成した。すると、遊びのアイデアが膨らみ、「こうしたい」という思いを友達と伝え合いながら試行錯誤し、必要なものをつくる姿や役割を分担する姿が見られた。また、その様子を見て遊びに加わる子ども生まれ、遊びの広がりがあった。これは、子どもの興味・関心を捉え、必要な環境を構成したことで、やってみたいという意欲につながったと考える。

実践3では、「やっぱりレストランをやりたい」と遊びの変更を希望した子をきっかけに、学級の目的が一つになり始めた。これは、「レストランとラーメン屋を合体したい」という子どもの声を保育教諭が拾い、クラス全体に共有したことで新たなアイデアの広がりを促し、それに賛同した多くの子の思いが繋がったと考える。一方で、合体案に反対する子もいたため、思いや考えを伝え合ういい機会と捉え、少人数での対話を促した。それぞれに思いがあり、自分なりの言葉で友達に伝えようとしていた。その姿を認め、足りない言葉を補ったり、イメージを言語化できるよう援助したりした。子どものやってみたいという思いを肯定的に受け止め、個々の思いがつながるよう対話を促したことは、共通のテーマを見出すための手立てとして有効であったと考える。

実践4～8では、イメージしたことを実現できるように、様々な素材を用意した。素材を手にするのと、どのようにするか考えを巡らせ、友達と相談しながらイメージしたものを実現しようとする姿が見られた。また、パン屋やレストランに関連する絵本等を読むことでさらにイメージを広げ、

「絵本に載っているオープンを作りたい」と新たな興味生まれ、遊びに取り入れようとする姿が見られた。パン屋

のオープン作りでは、ものだけでなく「いい考えだね!」とアイデアを友達に認められ、そのことが友達と関わって遊ぶきっかけとなる場面も見られた。実践9の本時では、お客さんとのやりとりに加え、友達と自然に役割を分担し、一人一人が遊びに没頭する姿が見られた。以上のことから、子どもの興味・関心に応じた意図的な環境の構成が、遊びのイメージを広げるとともに、目的の実現に向けて友達と協同して遊びを進めることにつながったと考える。



図8 実践2での様子



図9 目的の実現に向けて活動する様子

(2) AARサイクルの活用

実践1～9の全体計画は、図2「AARサイクルを活用したプロジェクト活動のプロセス」に沿って作成し、実践した。まず、環境構成として地域の散歩に出かけ、身近に様々なお店があることに気付けるようにした。対話する場面では、散歩での発見を振り返りながら、「自分はどんなことがやってみたいか」をテーマに思いを出し合い、個々がやりたいことを主体的に選択できるよう援助を行った。

(A)見通しでは、作りたいもののイメージを互いに伝え合い、必要な材料を準備できるようグループでの対話を促した。また、絵本や写真を用いてイメージの共有を図った(図10,ア)。

(A)行動では、共有したイメージの実現に向けて、友達と試行錯誤し、協力しながら遊びを進められるよう援助した(図10,イ)。

(R)振り返りでは、目的が実現するまでの過程を振り返り、友達との葛藤や折り合い、協力して達成した喜びを共有した。これにより、協同的な遊びの良さを感じることができるよう配慮した(図10,ウ)。



図10 AARサイクルによる遊びの展開の様子

このように、全体計画にAARサイクルを取り入れることで、友達と思いや考えを伝え合い、共通のイメージをもって遊びに向かう姿が見られた。また、全体計画のみならず、日々の遊びにおいてもAARサイクルを意識し、保育教諭が遊びに加わりながら、遊びの見通しがもてるよう声掛けを行った。活動後にはサークルタイムを設け、「困ったことはなかったか」「次はどうしたいか」といった振り返りを行うことで、次の遊びへの意欲へとつなげていった。こうしたプロセスを経ることで、共通のテーマを見出し、目的の実現に向けて思いを伝え合いながら協同的に遊びを進めようとする姿に発展したと考える。

(3) 環境の再構成

遊びを継続できるよう製作物をテーブルに展示し、各お店がイメージできる環境を保育室内に常設した。また、様々な素材や材料を用意することで、イメージしたものを実現させようと試行錯誤しながら製作する姿が見られた。しかし、品物がある程度完成すると、製作したい意欲が満たされ、関心が他の遊びへと移っていく様子もあった。そこで、レストランというイメージをさらに広げるための環境の再構成が必要であると考え、子どもの興味・関心がどこに向いているのか見取るようにした。制作物で保育教諭や友達とごっこ遊びを楽しむ姿から、レストランにはお客さんが来ることをイメージできる環境が必要だと考え、新たに飲食スペースを設置した。その結果、子ども達が自発的に白紙と鉛筆を手に取り、メニューの作成や看板作りを開始した。さらに、バインダーを用意すると、お客さんのオーダーを書き留める店員になりきるなど遊びの広がりやお客さんとのやりとりを楽しむ姿へと発展していった(図11)。



図11 お客さんとやりとりする様子

環境は、子どもの興味・関心、遊びの状況によって常に再構成されることが求められる。ねらいにふさわしい環境の下で、発達に必要な体験が得られるよう、子どもの姿に合わせた環境の再構成は、目的の実現に向かう手立てとして有効であったと考える。

2 作業仮説(2)の検証

思いや考えの違いによる衝突や葛藤する場面で意図的な対話の場を設定し、援助することで、自分の気持ちに折り合いを付け、友達と一緒に活動する楽しさや共通の目的が実現する喜びを感じるようになるであろう。

(1) A児の変容

遊び全体を通して、思いや考えの違いによる衝突や葛藤、そしてそれらに折り合いを付けようとする姿が多く見られた。特に、実践4～8において、A児に大きな変容が見られた。

当初、一人で黙々とパン作りに没頭していたA児であったが、自分で試行錯誤して完成させたオーブンを周囲に認められたことをきっかけに、友達と関わりながら遊ぶことへの関心が高まった。その変容は、オーブンの使い方を周囲の子に教えようとするA児の姿からも見て取れた。これは、自分の作ったものが友達に必要とされたことで、自己有用感が高まった姿であると考えられる。

その後の事例1において、保育教諭はいざこごを直接把握していなかったものの、A児が自らサークルタイムでその話題を切り出した。保育教諭は、個別に対話するのではなく、あえてクラス全体で共有できるサークルタイムでの対話を選択した。それは、一人一人に異なる思いや考えがあることに気付き、他者の多様な視点に触れる機会にしたいと考えたためである。話し合いの場では、周囲の子ども達が二人の主張を静かに聞いていた。時々、保育教諭が問いかけると、自分の考えを述べる子も見られ、他児のいざこごを自分事として捉えて耳を傾けている様子が伺えた。さらに、この対話の場面では、よく対立が生じていたB児との関係性にも大きな変容が見られた。これまでのA児は、いざこごが生じると感情のコントロールが難しくなり、保育室から飛び出してしまうことが多かった。しかし、今回の粘土を巡るいざこごでは、対話の場から一度距離は置いたものの、保育室内にとどまり、周囲の会話が聞こえる場所でじっと耳を傾けていた。これは、自分なりに状況を振り返り、自身の衝動を抑えようとする自制心の芽生えであると同時に、友達と目的を共有する協同的な遊びの楽しさを失いたくないという強い願いの表れであると考えられる。話し合いの後にA児が語った「みんなで遊ぶのが楽しかったから」「またみんなで遊びたいもん」という言葉は、共通の目的に向かって遊ぶ友達とのつながりを優先し、納得感をもって折り合いを付けた表れであると捉えられる。以上のことから、意図的な対話の場と適切な援助は、幼児が葛藤を乗り越え、協同的な遊びを楽しむ上で有効な手立てであると考えられる。

(2) 折り合う姿の援助の工夫

本研究では、表2「折り合う姿の援助の工夫」に示した視点を手がかりに援助を行った。実践3の「レストランの形式」を巡る場面では、バイキング形式を望む子と注文形式を望む子との間でイメージの違いが生じたが、保育教諭はこれを多様な考えに触れるいい機会だと捉えた。

まず、それぞれのイメージの背景にある思いを丁寧に汲み取って代弁することで、互いの願いをクラス全体で共有できるよう配慮した。その上で、「レストランはどのような場所か」を改めて



図12 A児の姿を追ったドキュメンテーション

問い返したところ、「注文と違うものが届いた経験があるからバイキングがいい」「店員が運んできてくれる方が嬉しい」といった、自身の経験や願いに基づいた多様な意見が出された。こうした対話の場において、保育教諭は結論を急がせるのではなく、双方が納得して合意できるまで粘り強く寄り添い、時には「両方の良さを生かすにはどうすればよいか」といった具体的な問題提起を行うことで、子どもが自ら折り合いの付く方法を探れるよう援助した。

このような関わりにより、子どもの中に相手が納得できるまで説明する姿や互いの妥協点を探る姿が見られるようになった。時間は要したが、保育教諭が仲立ちとなり、互いのイメージの違いを理解し合えるよう対話を促し続けたことは、子どもが他者の思いに気づき、納得感をもって折り合いを付ける力を育む上で有効であったと考える。



図13 グループごとに対話する様子

(3) 葛藤場面での援助の工夫

本実践では、子どもの思いが衝突し葛藤する場面を、社会情動的スキルを育む重要な機会と捉え、表3「葛藤場面での援助の工夫」の視点に基づき、援助を行った。単なるいざこざの仲裁に留まらず、子どもが自らの感情と向き合い、相手の思いを感じ取れるよう、一つ一つの援助に意図をもって関わった。

まず、感情が高ぶり対話が困難になった場面では、すぐに解決を迫るのではなく、子ども自身が感情をコントロールするための時間的・空間的な間を保障した。例えば、実践4～8の粘土の貸し借りを巡るいざこざの際、感情が爆発し一度その場を離れたA児に対し、無理に呼び戻すのではなく、本人が納得して戻ってくるまで見守った。これは、A児自らが状況を振り返り、自制心を発揮して自ら対話の場に戻ろうとする内面的な育ちを支えるプロセスとなった。

一方で、事例3「アイスの入れ方を巡って」では、言葉による伝え合いはできているものの、互いの主張が譲れず、納得感のある合意に至ることが難しい場面もあった(図14)。アイスの入れ方を巡るE児とF児の葛藤場面では、互いに理由を述べて話し合う姿が見られたが、双方の思いが強く平行線の話し合いが続いた。保育教諭はそれぞれの案を見比べるという提案をしたが、F児はE児の作ったアイスの方が良いと感じつつも、自分の考えを通したい思いもあり、葛藤していたと捉えられる。その結果、本心とは裏腹に「もうそれでいいよ」と言い、その場を離れるという行動につながったのだろう。その後の、お互いに浮かぬ表情だった様子やF児がE児を追いかけ、繰り返し話そうとする姿からは、形式的な合意だけでは心の折り合いがつかなかったことが浮き彫りとなった。



図14 折り合いを付けようと対話する様子

アイスの入れ方自体は合意に至ったが、E児の心にはF児の強い口調に対する納得のいかない思いが残っていた。このことから、葛藤場面の援助においては、遊びの進め方の調整だけでなく、言葉の伝え方や相手の感じ方といった心情面への配慮が不可欠であったと考える。言葉や表情の裏にある思いを丁寧に捉え、代弁していく援助こそが、子どもが葛藤を乗り越え、協同的な遊びを豊かにしていくために有効な手立てであると考えられる。

3 本研究を通して

本研究を通して、協同的な遊びにおける葛藤や折り合いの経験が、幼児の内面に多面的な育ちをもたらすことが見えてきた。子ども達は、対話を繰り返す中で自他の思いに気づき、自らの感情をコントロールしようとする自己調整力や自制心、そして自己有用感といった様々な社会情動的スキルの育ちを見せた。これは、共通の「好き・やりたい」という興味・関心を軸に、それを実現しようとするプロセスにおいて、多様な他者とつながり、自己発揮と葛藤、そして納得感のある折り合いを積み重ねることで育まれたものだと考える。こうした社会情動的スキルの育ちは、「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の育ちであるともいえるだろう。この豊かな育ちを土台に、様々なアイデアを生み出す姿（知識・技能の基礎）や友達と一緒に考え工夫する姿（思考力・判断力・表現力等の基礎）など、認知的スキルの育ちが促されたのだと考える。以上のことから、幼児期において、協同的な遊びの経験を積み重ねることは、豊かな育ちを支える上で重要であると考えられる。同時に、子どもの姿に応じた意図的な環境構成と援助の工夫の必要性が示唆された。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 共通の目的が生まれたことで、特定の友達に留まらない多様な関わりが展開された。思いを言葉にし、相手の意図を汲み取ることで「遊びがより面白くなる」実感につながり、互いに伝え合いながら遊ぶ姿が繰り返されるようになった。
- (2) 葛藤場面において、自分の主張を通すのではなく、相手の良さを認めながら自分の願いと折り合いを付けようとする育ちが見られた。目的の実現に向けて試行錯誤し、対話を通して互いに折り合おうとするプロセスは、協同性の芽生えであると考えられる。

2 課題

- (1) ドキュメンテーションを保育教諭の見取りの視点に留めず、子どもが折り合う姿を振り返る対話のツールとして活用し、葛藤や自己調整のプロセスを可視化する手立ての在り方を検討したい。
- (2) 子どもの興味・関心を引き出す環境を構成すると共に、保育教諭自身も「遊びを面白くしたい」という主体性をもって関わる共主体の視点をより深めていきたい。

【主な参考・引用文献】

- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省(2018)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・無藤隆 監修 古賀松香 著(2024)『主体としての子どもが育つ 保育内容「人間関係」』 北大路書房
- ・全国国公立幼稚園・こども園長会『幼児教育じほう』通巻第46巻第4号(2018.7)5p 青柳 宏『論説 開かれた協同性へ向けて』
- ・無藤隆 古賀松香(2016)『実践事例から学ぶ保育内容 社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」—乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは—』 北大路書房
- ・発達 通巻第179号 発行者：杉田啓三(2024.8.10)p.50-55 奥谷佳子「協同的な遊びと活動を支える、保育者の言動的援助」 ミネルヴァ書房
- ・無藤隆(2009)双書 新しい保育の創造 幼児教育の原則—保育内容を徹底的に考える— ミネルヴァ書房
- ・文部科学省(2022.9)『第7回教育復興基本計画部会事務局資料』OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030
- ・河村茂雄(2022)『子どもの非認知能力を育成する教師のためのソーシャル・スキル』 誠信書房
- ・岩立京子・西坂小百合(2018)『乳幼児教育・保育シリーズ 保育内容 人間関係 第2版』 光生館
- ・全国国立公立大学付属学校連盟幼稚園部会(2010)『協同して遊ぶことに関する指導の在り方』
- ・大豆生田啓友・おおえだけいこ 著(2020)『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』 小学館
- ・大豆生田啓友・岩田恵子(2023)『役立つ! 活きる! 保育ドキュメンテーションの作り方』 西東社
- ・大豆生田啓友 監修 おおえだけいこ 著(2023)『日本の保育アップデート! 子どもが中心の「共主体」の保育へ』 小学館